

転生した少年～俺だけ勇者システムなしとか、ハードモードじゃ
ね？～

GRAENA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世は高校生で死んだ。本来、死ぬ運命になかった少年は神様のご厚意で未来の日本に転生させてもらう。その少年のおかげで未来はどのように変化するのか。

目次

プロローグ	1
一話	5
二話	15
三話	25
プロフィール＋四話	36
五話	45
六話	56

プロローグ

俺の記憶は爆走トラックから女の子を庇って轢かれて死んだところで途切れている。

体がピクリとも動かずに、視界が明滅する。死ぬ、ということがこれほどまで身近に感じることはないだろう。道路に横たわり、赤い液体が体から出ていく。特にこれといった未練もない。強いていうなら、親と友達に何か一言言いたかったぐらいだ。

次に目を覚ましたのは、距離感も何も掴めない、どこまでも続いてそう、手を伸ばせば壁がありそうな真っ白い空間。

死んだのに目を覚ますのはどういうことか自分でもよくわからない。本当は死んでなかった、なんていう可能性も否定できないが、いくらなんでも病人を何も無い空間で放置はしないだろう。

そこから混乱に更に混乱を上乗せする事態が起きる。上からやけに神々しい、男とも女とも見える中性的な人が降臨。二、三言葉を交わし、その人が神であり、なおかつ俺は死んだことを伝えられた。頭がキャパシティオーバー起こしそうだ。

それからなんやかんやあって、神様が転生させてくれるようだ。便利な特典もくれる。

転生先は未来の日本。それしか教えてくれなかった。まあ、それもある意味転生の醍醐味だろう。知らないけど。

ちなみになんやかんやの部分を具体的に言うなら、運命の輪から外れた、とかなんとかで、本来死ぬ予定じゃなかった俺が死んでしまった、らしい。そして、輪廻転生の環から外れた、らしい。

神様に同情されるのは後にも先にもこの一回だけだろう。

特典は、RPGの基本として有名。強さの指標として用いられるステータス。小説の影響で前世でなんとなく、あればいいなあと思っていた能力だ。

そして今、俺の前には半透明の板が浮かんでいる。

筋力100
耐久100
魔力100
敏捷100
知力100
SP100
スキル

制御 経験値上昇 能力値上昇 身体強化 直感 空歩

ゲームマーカー心をくすぐられる。柄にもなく、ウキウキしてしまう自分がいる。

スキルはなんとなく便利そうな五つを選んでみた。空を歩けるとか軽く感動。

制御はおまけだ。一般人をステータスで表すと、魔力0の他は10。コップなんかを持てば、超サイヤ人成り立ての○飯の如く、握りつぶしてしまう。それを防ぐための制御。ありがたや。

そのあと他の説明を受けてから、いよいよ転生。神がぱちんと指を鳴らすと意識が一気に混濁する。部屋の床が抜けたような錯覚に陥るが、不安はない。

——頑張りなさい

意識がなくなる直前、神がそう言ったのを確かに聞いた。何に對してのメールなのかは分からないが、少しだけ悲壮な顔だった。その顔がなんの顔か知らないが、口元に僅かな笑みを浮かべて、不適に笑って見せた。もしかしたら、口角が少ししか動いてなかったかもしれないが、なんとなく伝わったようで、神の口角も若干ながら吊り上がった。

意識が覚醒する。

被っている毛布を押し退け、体を起こす。手は小さい。ペタペタと体を触ってみると、何もかもが細い。筋肉がついていない小学生の体つき。生き返ったのだと実感する。

これは神様の説明の通りだ。俺が目を覚ますのは今の体が六歳になっただけからだ。曰く、器と魂を馴染ませるために期間を要するんだとか。

その間に体験したことは、丸々引き継がれていく。家族の名前に自分の名前、生年月日、住所。意識を取り戻した瞬間に六年分の記憶が流れ込んできて、酷い頭痛に悩まされたのは記憶に新しい。金属バットで頭をフルスイングされた気分だった。

他にも色々な確認作業をした。

ためにステータスを開いてみれば。

level 3

筋力 120

耐久 120

魔力 100

敏捷 120

知力 140

SP 140

スキル

制御 経験値上昇 能力値上昇 身体強化 直感 空歩

少しだけ上がっている。レベルの上げ方は簡単で普通に過ごしていれば経験値が蓄積されて上がる。ただ、何をしたか、どれくらいしたかで、能力の伸びやレベルアップの期間が変わる。もろRPGだな。

他にも親が寝静まった後に、夜空を駆けてみたり（はしやぎすぎて帰ってくるのに四時間かかった）、身体強化を使って木を殴ったり（木が簡単にへし折れて、次の日ニュースになった）色々過ごして、気付けば、明日から小学六年だ。

いやあ時が経つのは早いなあ。

正直に言っ学校に行く意味がない。やることと言えば睡眠だけだ。夜中に特訓をしているのでその分の睡眠時間は確保したいのだ。知力のせい、眠っていても頭に入ってくるから当てられても全然平気だ。前世でもこの能力は欲しかった。

最初の頃は先生に何度か起こされたのだが、先生方もそのうち仕方ないと諦めていった。成績だけみれば、超がつくほどの優等生だからね、俺。

そんなこんなで神樹館六年、木川恭介。今日も元気に登校します。

一話

神樹館六年二組。

最後尾の窓際から二列目が俺の席になっている。風も通りやすく、窓が近いため、意外と温かい。控えめに言って最高。

朝のホームルームは一応連絡事項を聞かないといけないため起きてないといけない。頼杖についてポケーツと宙を見る。そこには半透明のボードが浮かんでいる。

level 15

筋力210
耐久200
魔力350
敏捷300
知力290
SP400

スキル

制御「+魔力制御」「+魔力放射」 経験値上昇 能力値上昇 格闘術 剣術 身体強化 直感 空歩 治癒力上昇

SP。つまりスキルポイント。これを支払えば新しいスキルを習得できる。習得できるスキルは、武術系統やら、知識系統やら、技能系統やら、さらには魔法系統など多岐に渡る。ただ、武術系統は日々の修練でも手に入る。知識系統も技能系統も努力でなんとかなる。

ただ、魔法系統だけはどうにもならない。魔力は身体強化の練習で今も使っているため扱えるが、魔法は使えない。まあ、使う予定はないからいいけど。

「やっぱり面白いな」

今でも思う。自分がゲームの中に入ったような気分だ。スキルを

使えば、レベルが上がれば、心臓が高鳴る。興奮が隠せない。自然にやける。夜が来るのが待ち遠しい。そろそろ、他の県や海の間にも足を伸ばそうかな。でも往復分の時間と魔力を考えるとなあ。

今のテレビでは、四国以外のニュースが流れない。神世紀だけしか生きてない人からしたら自然なことでも、平成を生きていた俺からしたら異常にも思える。

「何が面白いの?」

「ん? 鷺尾か」

俺の目の前の席の鷺尾須美。大和撫子という言葉がよく似合う少女だ。自分にも他人にも厳しい少女で、男子内での評価と言えば、かわいけれど、少し口うるさい、といったところだ。

「おはようございます」

「おう、おはよう。いやなに、独り言だ。なんでもない」

「そう? それと今日は寝ないようにね」

「善処します」

俺の返答に呆れたように息を吐く。鷺尾さん? 君の横の人もよく寝ているよね? 今も鼻ちようちんが――

――パチン

――あ、割れた。

「わあー! お母さんごめんなさい」

何か慌てた様子で手をわたわた動かした後、手をパンと合わせて頭を下げる。そそつと席を立て乃木の側に近寄り。

「許しません」

「ほんとにごめんなさい」

まだ寝ぼけているのか、見事に引っ掛かった。周りも少し笑っている。

「何やってるの? 木川くん。それに乃木さん、ここは教室で朝の学活前よ」

「本当だ。てへへ。おはよう、鷺尾さん、きよーくんも」

「おはようございます」

「おはよう、乃木」

乃木と俺はいわゆるお仲間だ。よく授業中居眠りで先生に起こされる。席も近いので、まあまあ話す。

「みなさんおはようございます」

おっと、先生も入ってきたし、席につくか。空いている席は一つ。今日も遅刻か。

「はぎーす」

廊下を走る音がしたと思えば、次はブレーキ音。体育会系の挨拶をした女子は、三ノ輪銀。クラス内カーストトップの女子だ。明るく活発な性格で、面倒見もいので好かれている。俺はあまり話したことはないが。

「ま、間に合った」

「間に合ってますん」

ぱしんと手に持っていたバインダーで三ノ輪の頭を叩く。三ノ輪はギヤーギヤー騒いでいるが、先生は気にした様子もなく、早く席に着くように促され、自分の席についた。

つーか、あいつのランドセルの中、空じゃん。何しに学校来たんだ？人のこと言えないけど。

「起立」

今日の日直は鷺尾か。

「礼」

くるりと体の向きを変えて手を合わせて礼。これがこの時代の作法。やらなきや、異端者扱いされそうだな。

「神樹様のおかげで今日も私たちがあります」

もう一度、向き直る。今度は神棚の方。

「神棚に拝」

もう一度頭を下げる。

「着席」

椅子に座り、寝る準備に入ろうとしたところで違和感に気付く。椅子を引く音も話し声もない。あるのは三人の戸惑う声。

鷺尾、乃木、三ノ輪は動いている。他は時間が止まったように動かない。

「なあ、鷺尾、なにこれ」

「えっ!？」

「何で動けてるの? きょーくん」

「何でって言われても」

答えに迷っていると、風鈴の音が幾重にも響いて聞こえた。

「来たんだ。私たちがお役目をするときが」

鷺尾が言う。乃木も三ノ輪も意味が分かってる様子だ。ただ、俺一人だけ置いてけぼり喰らってるんだけど。何? お役目って?

分からないことは重なるもので、窓から有り得ない量の光が入ってくる。目を開けることも許されない光の奔流に飲まれる。

次に目を開ければ、カラフルな樹海。食べたら腹壊しそうな蛍光色だ。鷺尾は落ち着いているが、乃木と三ノ輪は辺りを物珍しそうに見ている。

「なあ、三ノ輪。急で悪いんだが、ビンタしてくんない?」

スキル、直感が現実だと報せてくれるのだが、確認しないと。

「ああ、わかった」

パチンといい音が鳴った。ちゃんと痛い。現実だ。前世では画面の中か、本の中にしかなかった非日常。

「やべえ。ワクワクしてきた」

「何か言ったか?」

「こっちの話だ。それよりここどこだ?」

「時間がないから、要点だけ伝えるわ。ここは神樹様の結界の中。これから私たちが戦う敵がバーテックス。世界を滅ぼす外敵。あれが神樹様の元に辿り着いたら世界が滅びる。それを私たちが神樹様の力を借りて勇者となって倒すの。本来勇者になれるのは無垢な少女だけ。木川くんは戦えないの。だから、ここにいて」

「なるほど」

神様の頑張ってはこういうことか。

「あっあそこ見て」

乃木が指差した方向に、奇妙な生物がいた。あれがバーテックスか。

深い青の玉の左右の斜め下に水色の水の玉がついていて、深い青の玉の下からは白い柱のようなものが生えていて、その先に触手が二本垂らされている。そして、上には真っ直ぐ触手が伸びていて、水の球が絶えず産み出されている。

感想としては、強そうに見えない。けど、油断すれば痛い目を見ることになる。死んでも復活するゲームではなく、死んだらゲームオーバーの現実なんだから。

さて、俺ならどうする。攻撃方法は水の球を飛ばすぐらいか。

「あめつちに きゆらかすは さゆらかす」

ん？阿知女作法？

後ろを振り返れば、全員がスマホを構えていた。これが勇者になるための儀式か？

「かみわかも かみこそは きねきこゆ きゆらかす」

「みたまかり たまかりまししかみは いまそきませる」

「二みたまみに いまししかみは いまそきませる」

読み終わると、スマホの画面をタップした。このあとどうなるかはなんとなくは予想がつく。お決まりの変身だろう。

画面の向こうなら少女の変身シーンでも見れるのだが、同級生の変身シーンなんざ見たら犯罪になりそうなので、目を逸らしてバーテックスを眺める。

バーテックスは真っ直ぐ神樹様の方向に向かっている。移動速度は意外と速い。

俺も準備しておこう。今まで肉眼では分からない程度にしか纏っていないかった魔力。そこにさらに魔力を継ぎ足す。意思を持ったように魔力がうねりを上げて身体を覆う。特に腕と足を重点的に。

「よーし、ぶっ倒す！」

「ミノさん、私も！」

「待ちなさい！二人とも」

鷲尾苦勞人だなあ。というか、やっぱり勇者になったら身体能力上がるのか。

「さてと、俺も行くか」

遠くからでも分かっていたが、明らかに勇者劣勢。

鷲尾と乃木が吹き飛ばされて三ノ輪が助けに行った。その間、バーテックスを止める役がないせいで、神樹様の方向にどんどん進行。たまたま俺がバーテックスの進路に入っちゃったせいで矛先が俺に向いた。

水玉攻撃の第一波をかわし、全力でバーテックス目掛けて跳躍する。迫り来るのは絶え間なく生産されている大量の水の球。

普通ならかわせない弾幕。

空歩、発動。

足を踏み出した場所に紅い波紋が拡がり、魔力による足場が形成される。空の旅によく使うため、緻密なコントロールも可能となったスキル。

一歩、また一歩と宙を舞う。俺のステータスは耐久が低いので、一撃でも喰らってしまえば、戦闘に支障が出てしまう。常に視野を広く、油断なく。

そうして、水の球を全てかわしきることができた。目の前にはバーテックス。これで射程圏内。空歩でもう一度宙を蹴って、バーテックスよりも高いところまで上がる。

並行して、体に纏っていた魔力のほとんどを拳に集める。右の拳に集められた魔力は大きくうねりを上げる、紅くゆらめくその様は、さながら炎のようだ。

「はああああー！」

裂帛の気合いと同時に渾身の一撃を放つ。やや振り下ろし気味に放たれた紅の鉄槌はバーテックスの身体を大きく抉り飛ばした。

拳から解放された紅い魔力がキャノン砲となって地面に叩き付けられ、地面が震撼する。

流石に疲れた。初めての戦闘の疲労と魔力の枯渇のダブルパンチだ。高度が下がり、地面が近くなっていく。落ちても死にはしないが、痛いものは痛い。残り少ない魔力を真下に放出し、落下の勢いを殺す。

完全に殺しきった頃にはもう地面から五十センチくらいのところ。これくらいならと、魔力の放射を止めて下に落ちる。

すடன்、と地面に降り立った瞬間に膝から崩れる。がくと膝を折りながら、前を見る。

倒したバーテックスはというと、粒子となって天に上っていった。あんな変な生物の散り方にしては意外ときれいだと思ってしまった。完全に敵が消えたのを確認してから、後ろに倒れこむ。

粒子が消えた瞬間に、今まで暗かった空間に光が差し、天から花びらが落ちてきた。バーテックスを倒した後のボーナスステージみたいなものか。

だが、それよりも気になるのは脳内で鳴り続ける盛大なファンファアレだ。ファンファアレはレベルアップの合図だ。それにしただけで重なりすぎたファンファアレ。ステータス画面を見てみれば、びっくり。

level 26

筋力 430
耐久 250
魔力 580
敏捷 530
知力 350
SP 620

スキル

制御「+魔力制御」 「+魔力放射」 経験値上昇 能力値上昇 格闘
術 剣術 身体強化 直感 空歩 治癒力上昇

いや、ホントにびっくり。一気に11も上がった。

レベルが上がった分、魔力も回復してきた。お陰で魔力枯渇で起きる頭痛も和らいできた。ただ、大地が俺を離してくれない。

それにしても、いつまでここにいるんだろう。

そう思っているとタイミングバツチリ、演出が始まった。花びらが巻き上がり、視界を埋め尽くす。視界を遮られてから数秒、花びらが消えて見えたのは見知った天井、男子の友達が覗き込むように見ている。

「なんで急に寝転んでんだ？ついに机が嫌になったのか？」

身をぐつと起こす。疲労が半端じゃないが、そこは根性で。クラスメイトの皆は慌てた様子でいる。

「ああ、そうだな。どうせなら教室の後ろに布団でも敷こうかと思っているところだ。ところでなんで皆騒いでんだ」

「それが、鷲尾と乃木と三ノ輪が消えたんだよ。神隠しか？」

ニアピンどころか花丸満点の解答頂きました！神隠し、というより、神（樹）隠しだけだ。

そんな馬鹿なこと考えてると、安芸先生がパンパンと手を叩いて、皆を黙らせる。

「皆さん。落ち着いてください。明日、連絡があると思うので、今日は落ち着いて過ごすように」

皆は若干釈然としてなさそうだが、はい、と返事を返した。

皆、今日は勉強に励めそうになさそうだ。俺？俺は寝るから関係ないね。鷲尾がいないから、一から六時間目までぶっ通しで寝れそう。腹なんて寝てればすかない。

「木川くん、起きなさい」

「ん？ああ、安芸先生、おはようございます」

「もう四時ですけどね」

「ありや、本当だ。起こしてくれてありがとうございました。それではさようなら」

「待ちなさい」

真面目な空気だ。説教？心当たりがありすぎて分からない。どれだ？宿題を空白で出したことか？学校に枕持参できたことか？居眠り……………は最早容認されてるから違うな。

ここは思いきって聞こう。

「説教ですか？」

「違います。単刀直入に言います。今から私と大赦に来てもらいます」

「え？なんで」

口をつけて出た言葉に答えるように先生がスマホを取り出した。画面は動画の停止状態。促されるように三角マークを押すと、俺がバーテックスを殴り飛ばすところが、それはくつきりと写っていた。

「拒否権は？」

「ないです」

逃げよう。

「あなたのお母さんから伝言で『口答えしたら拳骨ね♪』だそうです」
先生、無表情なのに声を弾ませるとは中々器用ですね。それと三代越えて四十代に差し掛かりそうなおばさんが♪はダメだろ。

「さあ、行きましょう！大赦が俺を待っている」

「え、ええ」

俺の手のひら返しに引き気味の安芸先生。だって母さんの拳骨は痛すぎるんだよ。俺の耐久は低い一般人が全力で俺を殴ったところで痛くも痒くもない。それなのに、俺の母さんは防御力を無視してダメージを与えてくる。生まれてから人から受けたダメージは母さんの拳骨くらいだ。

母さんがバーテックスと戦えばいいのに。無垢でも少女でもないけど。

そのあと、日が暮れるまで大赦で検査を受けました。結果は、当た

り前の勇者適正0。

勇者じゃないものが樹海へ入るなど許さんとかから言われると思っ
たら、そんなことはなかった。歓迎もされてないが。なんというか、
扱いに困っている感じだ。俺は勇者と同等の扱いだが、勇者とは言わ
れない。まあ、別にいいけどね。

「そうだ、先生。俺、制服で戦わないといけないんですけど、もし破れ
たら替えとか貰えるんですか？」

「はい。大赦がサポートしますので」

「ありがとうございます。もう帰ってもいいんですか？」

「はい。お送りするので少々お待ちください」

なんか、壁を感じる。先生としてではなく、大赦の人間として接し
てるから仕方ないが、少しだけ寂しい。

勇者をステータスで表すと。

level |

筋力 300 ~ 500

耐久 200 ~ 400

魔力 0

敏捷 350

知力 200 ~ 300

SP |

スキル

二話

初めての戦闘から半月後。二体目のバーテックスとの戦闘に苦戦していた。

ただいま台風の真っ只中。暴風吹き荒れ、呼吸もしにくい。

前にいるのはリブラ・バーテックス。天秤座の名を冠するバーテックスだけあって、まんま天秤の姿。皿の代わりに分銅がついてるところ以外、ただの細長い天秤だ。

リブラ・バーテックスは独楽のように回転していて、風を巻き起こし、接近を許さない。

俺は風さらし。防御も支えもない。園子は槍を樹に突き刺して風に耐え、鷲尾と銀は園子にしがみついている。

ちなみに何故名前呼びかと言うと、これから一緒に戦うんだし、親睦を深めるということで、名前呼びになった。

何故鷲尾だけ呼ばないのかと言うと、許可を貰ってないからだ。

「あのぐるぐる。上からの攻撃に弱そうだけど」

「どうしようもない」

「どうしようかなあ………できるかな」

手を銃の形にして、人差し指をバーテックスに向ける。指先から紅の球体が形成される。ただ初めての試みだが、意外と上手くいった。日々の訓練は大切だなあ。

パシユンという音のあと、拳銃を撃ったときのような衝撃が腕に伝わる。撃ったことないから分からないけど。

紅の弾丸はバーテックスの胴体に直径十センチぐらいの風穴を開けた。ただすぐに再生する。

「おー。意外と使えるかもな」

「きょーくん。今のでバーテックスの動き止めれる？」

「んー。微妙なところだな。バーテックス痛覚ないし」

「なんとかして止められないのか？」

「少し時間くれ」

魔力を掌に集める。急激に体から力が抜けていくが、抜けた分、掌

に紅の球体ができる。大きさはテニスボールより二回りは大きい。

自分の腕は大砲。このイメージで撃ち出す。さつきとは違い、ボンツ！と耳が破壊されそうな音が俺の手から鳴る。肩が外れそうな反動の直後、バーテックスの体が吹き飛ぶ。ついでに女子たちも衝撃波で吹き飛ばされてた。

「回転止まったけど……大丈夫？」

「大丈夫に見える？」

「……………銀借りまーす」

「え？」

鷲尾のジト目を流して、銀の膝裏と首に手をやって、空歩を使って空を駆ける。その手際に銀は唖然として、園子は、おおーと興奮気味。鷲尾は顔を赤くしながら破廉恥よ、と言ってる。

空歩には使い方が二つ。自分の足裏から魔力を流して足場を作るか、あらかじめ足場を作ってそこを踏むか。

前者は普段空を歩くのに使い、後者は空中での方向転換用だ。

他人に使ったことないから自信を持って言えないが、後者の力を使えば他人にも足場を作れると思う。

止まってるなら絶対にできるが、走ってる他人の足場を一個一個作れる気がしない。

要するにこうするしかない。俺は悪くない。

「きよ、恭介」

「我慢してくれ。他人に足場を作る練習はしてないんだ」

「わ、分かった」

バーテックスを見下ろせる位置に着いた頃に、バーテックスは回転を始めた。

お姫様だっつこから銀を下ろして、背中を優しく叩く。

「じゃあ銀、行ってこい」

「お、おうー」

銀は躊躇いなく、足場から落ちる。そのまま上からバーテックスを削り倒した。

バーテックスが解体され、粒子となったところでファンファーレが

鳴り響く。

今回銀に止めをささせた理由は二つ。近接戦闘系装備だったのでバーテックスの硬度を知っていて貰いたかった。ただこっちは三割程度。

もう七割は味方が倒した場合も自らに経験値が入るのかということ。結果は入る。今回上がったレベルは7。

RPGと同じくレベルが上がれば上がるほど、レベルアップに必要な経験値が必要になる。

そして、この前と同じく俺は他の勇者とは違って時間が止まる前に元いた場所にさつきまでの姿勢で戻される。

とどのつまり授業中の教室に戻った。立ったままの状態のせいで、くすくす笑われた。

課題も見つけたし、今日から新たな訓練を取り入れよう。

level 33

筋力580

耐久290

魔力690

敏捷620

知力380

SP780

スキル

制御「+魔力制御」「+魔力放射」 経験値上昇 能力値上昇 格闘
術 剣術 射撃術 身体強化 直感 空歩 治癒力上昇

今、何故か知らないけど安芸先生に勇者三人＋α（俺）が集められていた。何も悪いことしてないんだけど。

「木川くん。次のお役目はあなたは見てるだけにしなさい」

開幕早々、戦闘外通知。

「ええ！」

「あなたがいたら他の勇者が育たないのよ」

「先生、一他の勇者が頑張ってるなか俺一人休むのは悪いです《俺のサンドバッグを取り上げないでください》」

「木川くん……………」

「先生、そのバカを見る目をやめてください。これでも学年トップなはずですよ」

「それが余計に質が悪いのよね……………」

ちよつと鷺尾さん？聞こえないように言っただつもりなのかもしれないけど俺隣だから普通に聞こえてるからな。

「黙れ、ワツシーナ」

「な、何で知ってるのよ！」

「園子から聞いた。アイドルみたいだな。ワツシーナ」

「乃木さん！」

「ひゃー」

「ワツシーナうるさい。先生の話はまだ終わってないぞ」

「脱線させたのは木川くんでしょ！」

「鷺尾さん。落ち着きなさい」

「……………はい」

「それであなたたちの中から指揮を取る隊長を決めましょう」
んー。誰でもいい。強いていうなら頭の回転が早い園子が適任かな。

「乃木さん。隊長を頼めるかしら」

「わ、わたし？」

「あたしはそういうの柄じゃないから、あたしじゃなければどっちでも」

銀はどっちかというのと、精神的支柱として副リーダーだよな。アフターケアとか上手そう。

ワツシーナは頭が固すぎる。戦闘において、柔軟な思考は常に要求される。つまるところワツシーナには、あまり向いてない。

横のワツシーナは若干不満そうだが、顔にも声にも出さないで賛成の意を示す。

「それで、あなたたちには連携を深めるために合宿に行ってもらいます」

「合宿?」

「頑張れよ」

「木川くんも参加よ」

「え?マジで?」

めんどくさっ!俺の訓練は基本的に一人の方が効率がいいのですか?」

「ええ、本当よ」

「いえ、あの……女子三人の中に混ぜるのは恥ずかしいので辞退します」

「お母様にご報告しましょうか?」

「了解です。日程はいつ頃からでしょうか?当日はどこに集合でしょうか?」

そんなことがあって今日が合宿の日。現在、貸し切りバスの中。いや、たかだか四人のためにバス貸し切りとか。

「遅い。三ノ輪さんは何をしているの?」

現在、銀が遅れているせいで鷺尾の機嫌が悪い。それなのに鷺尾の肩に頭を預けて寝てる園子は凄いと思う。

「悪い悪い。遅くなっちゃって」

「遅——」

「次から気をつけるよ。早く出発したいから座れ」

長くなりそうなので、鷲尾の言葉を切る。

「え……………あ、うん」

鷲尾が不服そうに俺を見るが、知らんぷりでアイマスクを装着する。

合宿先は海近くの宿。普通に泊まったら相当高そうだが、大赦が金を全て出してくれるらしい。ナイス、大赦。

今は連携の訓練。

バレーボールが発射される機械が砂浜に並んでいる。発射されるバレーボールに当たらずに銀がバスに到達すればOKらしい。

「先生。俺は近距離で銀の支援ですか？それとも遠距離で鷲尾の手助けですか？」

「鷲尾さんの手助けをお願いするわ」

「了解です」

鷲尾の側に移動して、指を構える。魔砲は周囲を巻き込みそうなので魔銃を使う。

「はい、スタート」

安芸先生がパンと手を叩いて、バレーボールが噴出される。

山奥の木を二、三本穴だらけにして手に入れた射撃威力。揺らした木から落ちる木の葉を撃ち落とす射撃技術。

それらをとくどご覧あれ。

パパパパパパン。

両手の人差し指から絶えず魔弾が発射される。魔力を垂れ流しにすれば、少しの間だけ、レーザーにもできるようになった。

……………

……………

……………

「木川くんは見てるだけにしなさい」

「えー！折角特訓したのに」

特訓が仇になったか。

特にやることもないので、適当に過ごすことにしよう。先生にも特訓するので別のところに行つてきますと言つておいた。

歩きながらふと思ひ出した。

そういえば、結構前に海の向こうへ行こうと思つてたな。よし、行つてみよう。

空歩で宙を歩き、ステータス任せにぐんぐん加速して、そして何かを突き抜けた。体に残る奇妙な抵抗感の余韻が気持ち悪い。

だが、それすら忘れさせるほど目の前の光景は衝撃的だった。

「地獄かよ……………」

目の前に広がるのは地獄と形容するのがふさわしい。足の踏み場なんてない、地面が全てマグマで覆われていて火柱も立ってる。

そして絶望的なのは、バーテックスが復活してる。今はまだ全然形になってないが、時間が経てば元通りになるだろう。

なら、今破壊すればいいのでは？

答えは、無理だ。

浮遊する、白い楕円形の体にぱっくり開いた口しかない異形な生物がバーテックスの体と融合して修復している。

あれは要するにバーテックスの細胞だ。バーテックスが星座になぞらえられているなら、星座になれなかったあれはさしずめ星屑といったところか。

星屑は見渡す限り無限にいる。俺が持つすべての魔力を攻撃に使つたところで焼け石に水だ。

ぼんやりしていたのが悪かった。星屑の接近に気付くのが遅れた。目の前までその生物が二体迫っていた。

即座に腕と足に魔力を纏い、前にいたのを迷わずアッパーカット。横から噛みついてきた星屑は回し蹴りで吹き飛ばす。

「吹き飛ばー！」

手に魔力を集中させ、魔砲を撃つ。反動を抑えたので、肩が外れることはなかったが、腕がジンとする。

星屑の壁に穴が開く。

そこでファンファーレが鳴り響く。鳴ったのは一回分。ポジティブに考えよう。周りには星屑けいけんちが無限に存在。スキルも強化できて、レベルも上がる。一人でやるより効率的だ。

「……………ここはまさかのボーナスステージ?」

なるほど理解した。

「SPを50消費して”魔力回復力上昇”を取得します はい

／いいえ」

「はい」

「SPを100消費して”武器創造”を取得しますか

はい／いいえ」

「はい」

手に刀を作り出す。

「さあ、狩りを始めよう」

「やばい熱中しすぎた」

今日の訓練、俺は勇者装備はないのでジャージ参加だ。なので、汗でぐっしよりになるうが大赦からの支給品なのでいいか。

外に出た頃には月が出ていた。

いくらテンションが上がっていたとはいえやり過ぎた。

だが、おかげでレベルが4も上がった。さらに熱耐性と気配察知、集中のスキル獲得。

ホクホク顔で宿に戻ると、安芸先生が仁王立ちしていた。風呂に入ったあとのようで、髪が濡れ、顔が上気している。

「どこにいったのかしら?」

「ちよつと世界の果てまで」

あながち嘘でもない。これで納得してくれないかな。

「冗談はいいです」

スッパリ！

「本当ですって。なんなら世界の終わりまで見てきましたよ？」

「……………神樹様の結界から出たの？」

「多分出ましたね。なんならそこにいた白い奴らも殴り飛ばしてきたぐらいです」

「はあ。嘘は言っていないようね。入りなさい」

「はい」

「それと——」

「言いませんよ。あいつらには。あまりに残酷すぎる」

「……………木川くんは聡明ね」

「学力学年トップですからね」

「その発言さえなければ、ね」

「俺の性格なんで」

そのあと風呂に入ってさっぱりしてから寝ました。熟睡でした。

一方隣の部屋では、こんな会話がなされていた。

「好きな人の言い合いっこしよーよ」

「好きな人って……………三ノ輪さんはどうなの？」

「んー。好きな人か分からないけど、気になるって意味だと恭介かな」

「おー、ミノさん大胆！でもきよーくんはクラスの女子からの人気高いよねえ」

「そうだな。他の男子みたいにうるさくないし、頭もいいし、意外とカッコいいからな。いつも寝てるけど」

「確かに木川くんは頭がいいわね。教え方も上手だわ」

「そうなのお？」

「ええ。いつも寝てるのに」

「私の居眠り仲間だからねえ」

「寝てる方が頭よくなるのか？」

「木川くんと乃木さんが特殊なだけよ、三ノ輪さん」

「きょーくん、休み時間はたまに起きてるんだけどねえ」

「起きてるときは普通に皆と話してるんだよな？」

「そうだよお。たまに抜けてるけど、話は面白いし、話しやすいよお」

「そうね。そう考えると、木川くんが人気なのも頷けるわね。凄いきは朝から放課後まで寝てるけれど」

「そういえば、木川くんって勇者じゃないんだよねえ」

「それなのにあたしより強いけどな」

「なんで強いんだろうねえ」

「明日にでも聞いてみようかしら」

三話

朝日が地平線から顔を出して、きらきらと海が光っている。

俺は二階の自分の部屋の窓からその様子を少しだけ眺めてから窓枠を蹴って外に飛び出す。

大赦の人から借りた釣竿を肩に担いだし、いざ大海原へ。

と思ったのだが、こちらを見る視線に気が付いた。今は朝の五時を少し回ったぐらいの時間なので、起きてる奴といえば。

「鷲尾？」

振り返れば大当たり。鷲尾がこっちを見ていた。見えない階段を下るようにして、鷲尾が手をかけてる窓枠に近付く。

「おはよう、木川くん。釣り？」

「そ。海のと真ん中で釣糸でも垂らしてのんびりしようかなあ、と。鷲尾も来るか？」

「……………そうね。ここにいてもやることないから、お願いしようかしら」

「承りました、と。ちよつと待ってろ」

魔力回復力上昇の効果で今なら多少魔力を使ったところですからすぐに回復する。

ということ、魔力で道を作る。空中に波紋が広がり、うつすら赤い道が続く。

「これは凄いわね」

「だろ？体の脱力感で今すぐ崩れそうだけど」

「怖いこと言わないでよ……………」

「冗談冗談。ほれ、靴……………は別にいいか。行くぞ」

「ええ」

おそるおそるといった様子で道に乗り、何回かふみふみしてその強度に驚いてる。

ところで、道にはうつすらとした赤色がついてはいるものの、下は基本透けて見える。

さつきまでは下が屋根だったから安心感があったようだが、それも

終わり、下がコンクリートの地面になった。

鷺尾の足が生まれたての小鹿のようになってる。

「怖いなら手でも繋いでやるか?」

「だ、大丈夫よ」

大丈夫そうに見えないのだが?

「強がらなくてもいいのに。ほれ、ゆっくりでいいから」

鷺尾の手を掴み、鷺尾のペースに合わせる。

目的地についたのはそれから三十分後だった。中程まで歩いた頃に、ようやく慣れたのか自分の足で歩けるようになった。横に俺がないとダメみたいだが。

魔力を薄く広げ、四メートル四方の足場を作る。俺は縁に腰かけて足をぶらりぶらりと宙に投げ出しながら、釣竿の先端にルアーを着けて、遠くに投げる。

闇雲に投げてるわけではなく、気配察知で魚の群れに放り投げる。

二分に一回のペースで釣れてる。ただ、クーラーボックスは持ってきていないのでキャッチ&リリースだ。

釣りスキルを覚えそう。

「木川くんは釣りをしたことあるの?」

前世でね。なんて言ったら頭のおかしい奴だな。

「ネットの大海をサーフィンしまくって覚えただけだから今日が初めてだな。他にもスキューバ、サーフィンぐらいならできると思う。どっちか一つやりたいな」

「多才なのね」

「出来ることが多いのは良いことだろ? 将来の幅が広がるし」

「授業中寝てる人とは思えない発言ね……………」

「寝てても分かるからな」

「これで私よりも頭が良いのが腹立たしいのよね……………」

「ドンマイ!いくらでも教えてやるから元気出せ!」

振り向いて、星が出そうなほどいい笑顔でサムズアップしたのだが、頭に手刀を落とされた。

「あはは。そうカリカリするな。ほれ釣竿持って、海でも眺めてれば、心も落ち着くぞ」

「……………そうね」

鷺尾が俺の横に座って渡した釣竿を握る。

「空から糸を垂らすことなんて、これから先絶対にやらないわね」

「これからもっと面白い体験をできるかもしれないぞ？」

「木川くんが言うと言得力が違うわね」

「俺は面白いこと大好きだからな。それよりもうそろそろ戻るか。朝御飯の時間だ」

「もうそんな時間？」

「時間を忘れるほど俺といるのが楽しかったのか？」

「……………そうかもしれないわね」

……………鷺尾がデレた！

「木川くんといると退屈しないわね」

そう言って笑う鷺尾は、なるほど純真無垢な女の子だ。俺がロリコンなら危なかったぞ。

朝食も終わり、勉強の時間。しかし俺にとっては睡眠時間と同義。

「zzzzzz」

「次のところ、乃木さん」

「はいー。バーテックスが生まれて、私たちの住む四国に攻めてきたんですー」

「正解よ。次、木川くん」

「バーテックスには通常の武器が効かず、人類の生存圏は四国のみと大幅に減少したんですー」

「正解よ」

（今ので聞いてたんだ）

次の座禅でも俺と園子はぐっすり眠りました。

今日の訓練も俺はやらなくて良かったので、地獄で星屑と戯れていた。今、右の手のひらでくるくると鉄球を弄りながら、もう片方の手で色々なものを投げる。

「よっ、ほっ、とおー！」

今は投擲術を習得するための訓練中兼武器創造で作り出せる武器の確認だ。

今投げたのは、一投目がダーツの矢、二投目がフオーク、三投目がナイフだ。これらは武器として扱われた。基準が広い。

星屑に当たっても、怯みはするもそれほどデカイダメージは与えられていない。

他にもクナイ、手裏剣、チャクラム、鉄球、ブーメランを投げてみたが、どれもいまいちだった。刺さるものより、衝撃を与えるものの方が有効だ。

総じて遠距離系統の武器は効果が薄い。

「やっぱ近接戦闘がいいか」

刀身一メートル超えの刀を一本。刀の先まで魔力で覆う。

人を切り裂けるといっても、星屑にとつてはただの鉄の塊でしかない。傷は与えられるかもしれないが、それだけだ。

魔力を通して初めて効果を現す。それは己の体でも同じで、魔力を纏わない拳では星屑は倒せない。

遠距離系統の武器の効果が薄い理由はこれだろう。投げた瞬間から包んでいた魔力は徐々に霧散する。

魔銃や魔砲は内包している魔力量が違う。だが、遠くに行けば行くほど弱くなる。ゼロ距離で放てばバーテックスをまとめて吹っ飛ばせるだろう。衝撃が怖いのでやらないが。

魔力を纏った刀で近くにいる星屑を切り裂く。

空歩で敵地に突っ込む。周りは一面白景色。

半径一メートルに気配察知を集中させる。右手に刀を、左手はいつ

でも魔銃や他の武器をつくれるように空けておく。

一体の星屑が俺の間合いに入った瞬間、体がバラバラになる。続いて四方八方数で押し寄せる星屑を、切り裂き、殴り、蹴り、撃つ。

常に死角を作らないように動く。星屑の真価は数の多さ。動きは単調で読みやすい。周りの星屑に攻撃の順番をつけて、効率的に動き、常に向こうの間合いには入らない。

俺の耐久の低さでも星屑の攻撃は耐えることができるが、一度体勢を崩されれば、次々に群がり、あの歯で食い散らかされるだろう。

この命綱なしの綱渡り。

「燃えるねえ」

経験値の荒稼ぎはまだまだ終わらない。

かけてあったアラームが鳴った。ということは向こうでは五時になったということか。

刀を放り投げ、両の掌から魔砲を放つ。周囲の星屑は衝撃波で怯み、射出した魔弾の方向を見れば、一直線に道が出来ていた。

できた穴が星屑によつて塞がれる前に、急いで抜ける。

逆方向に魔力を噴出して、速度をブーストする。

勢いそのまま神樹様の結界の中に逃げ帰る。

何度経験しても慣れない奇妙な抵抗感を感じながら、海上に投げ出される。海にドボンする前に急いで体勢を立て直して、空中にとどまる。

今度はしつかりと夕方に戻ってきた。

「ふうー、まずは風呂だな。向こうで戦うときは上半身裸でやるか」
絞れそうなまでに汗を吸ったTシャツを脱ぎ、歩いて帰る。テレポートか瞬間移動のスキルが欲しいと切実に思う。

砂浜に降り立つ。勇者達は訓練終わりで疲れてるご様子。

「お疲れ様」

ぐてーとしてるからいつもの三倍やる気無さそうに見える園子。

「きよーくんもお疲れ様。なんで上脱いでるの〜?」

特に顔を赤らめるでもなく、普通の様子で聞いてくる。

「汗が凄いんだよ。こちらら勇者装備ないんだから、毎回Tシャツ無駄になる」

「木川くん!上を着なさい!」

鷲尾が顔を真っ赤にして目を隠してるが、指の隙間から覗いてるの
見えていますよ。意外にもムツツリ?

「上がないんだよ」

「別に大丈夫だろ。恥ずかしがんなよ、須美」

銀は特に反応を示さない。というか慣れてる?

「きよーくん、筋肉凄いねえ。細マッチョさんだ〜」

「鍛えてるからな」

「どれどれえ〜…………おお、すごいすご〜い」

園子がペタペタと俺の二の腕を触ってくる。

「今俺汗ヤバイんだけど」

「別に大丈夫だよ〜?」

「なら、いいや」

「あつ、あたしも触らせて。…………おお硬い」

「訓練してるからな」

「へえー。あたしらも訓練してるから筋肉つくかもなあ」

「女子としては複雑だよね〜」

「そうか?重いものなんて持てません、なんて女子よりいいと思うぞ」

「そうか?」

「そうそう。頑張ってる証だな」

「そっか。よし、頑張るぞお!」

「おおー」

level 40

筋力800

耐久310

魔力890

敏捷900

知力400

SP750

スキル

制御「+魔力制御」「+魔力放射」 経験値上昇 能力値上昇 格闘

術 剣術 射撃術「+砲術」投擲術 身体強化「+腕力強化」「+脚

力強化」「+集中強化」 直感「+超感覚」 空歩「+天道」 「+展拡」

集中「+視覚強化」「+余剰強化」 気配察知「+範囲拡大」「+精密化」

武器創造「+創造速度上昇」 「+硬度上昇」 治癒力上昇 生存本能

熱耐性

風呂からあがって、自室で敷かれた布団に寝転びながらステータスをじっと眺める。

「凄いスキルなんだよなあ」

自分が強くなっていくのが目に見えて分かるのは嬉しいものだ。ステータスも順調に上がってる。耐久以外。

もう素の状態で星屑の体当たりを——止めよう。受けたら、内臓の一つ二つは破裂する。耐久が上がっても死ねば本末転倒。

俺の作戦は、かの有名なRPGに習って「いのちをだいじに」しながら「ガンガンいこうぜ」だな。

「きょーくん。入っていい〜?」

「どうぞー」

戸を横に開けて中に入ってきたのは、勇者三人。なんか一匹、鳥人間が混ざってるけど。

「どうした? 大人数で枕投げでもするのか?」

「木川くんに聞きたいことがあつて」

「まあ、とりあえず座れよ」

俺は布団を一枚敷くだけなので、テーブルと椅子は寄せてあるが、置いたままだ。

茶を差し出ししながら、話を聞く。

「聞きたいことつて何だ？」

「木川くんは勇者じゃないのよね？」

「そうだな。適正ゼロの一般人だ」

「なら何であたしより強いんだ？」

「んー。何で、か」

「言いたくないなら言わなくてもいいんだよ？」

「いや、これからも一緒に戦うわけだし。簡単に言えば、勇者以上に身体能力を引き上げる力を持つてるからだな。俺は魔力って呼んでる」
手を見せて、魔力を放出すると、最初のバーテックス退治の時みたいな炎が天井の高さまで吹き出る。

鷲尾と銀が驚いて後ずさる。対照的に、園子は目を輝かせて食い入るように見ている。これが本当の火だったら焼き鳥だな。

鷲尾と銀も熱さがないと分かるとまじまじと見てくる。

「これが分かりやすく見せた魔力だ。これを纏えば勇者以上の力が引き出されるんだよ。他にも空中に足場を作ったり、銃弾みたいに飛ばしたりできるから万能だな」

「便利そうだな」

「実際便利だぞ。重たい買い物袋も楽に持てたり、魔力で覆えば服も汚れないし」

「使い方が庶民じみてるわね」

「庶民だからな。でも自分の体液に効果がないのがなあ。なんで汗も弾いてくれないかなあ」

「いいなくわたしも空を歩いてみたいよ」

「今から行くか？光がないから星が綺麗に見えるぞ？」

「えっ！いいの?!」

「あつ、あたしも行きたい！」

「じゃあ行くか。靴はいいけど、なんか羽織るもの取ってこい。さすがに夜は冷えるからな」

「りようかーい」

「待ってよ、ミノさくん」

元気いいよな、あの二人。あのバイタリティーは羨ましいことで。

「行かなくていいのか？ 鷺尾」

「私は……………」

「お前めんどくさいよなあ。もう少し子供になれよ」

「むっ。そういう木川くんももう少し子供になった方がいいんじゃないの？」

「そうかもな。とりあえず、あいつらを見習えよ。少しぐらいわがまま言ってもいいと思うぞ」

「……………」

「取ってきたぞー」

鷺尾が何かを言おうとしたところで、戸が乱暴に開けられる。

銀が長ズボンにパーカー。園子は暖かそうなコート。鳥パジャマから着替えたみたいだ。

「はい、須美のも」

銀が手渡したのは鷺尾の上着。

「え、あ、ありがとう。三ノ輪さん」

「いいっていいって」

「それではご案内致しましょうか」

窓をがらりと開けてからはちんと指をならす。するとどうでしょう。園子たちの足元から、紅の道が夜空へと伸びる。演出は大切だろう。

ところで何で銀と園子は躊躇いなくその上を走れるんだよ。鷺尾なんか二回目なのに二人より遅いぞ。

海のと真ん中で四人で見る星空はなかなか乙なものでした。

三十分ぐらいの天体観測は園子のくしゃみでお開きになった。

最終日も星屑のバトルで終わった。バーテックスの再生も大分進んできたので、バーテックス襲来ももうすぐになりそうだ。

おまけ

釣りのあとの朝ごはん。

「二人ともどこ行つてたんだ?」

朝御飯の席で銀が口を開いた。席は俺の横に鷺尾、前に銀、斜めに園子。

「海のど真ん中で釣り」

「面白そうだな!」

「結構面白かったぞ。でも銀には向いてなさそうだな。じつとしてるの無理そうだから」

「そうだね。ミノさんに釣りは向いてないと思うよ」

「ぐっ、言い返せない……」

「それでそれで?何か面白いことはあったの?」

「鷺尾がデレたこと」

あつ、鷺尾がむせた。

「ゴホツゴホツ」

「大丈夫か？」

「誰の…ゴホツ…せい…」

「ほれほれ、喋るな」

背中を撫でたり、とんとん叩く。ようやく呼吸が落ち着いた頃、園子が核爆弾を投下。

「おお！夫婦みたい」

「ふっ……！」

むせたり赤くなったり忙しいな。

「鷲尾が赤くなつたまま固まった」

「からかいすぎちゃった」

「恭介も園子も次のお役目の時は背中に気を付けろよ？」

「りょうかい」

プロフィール十四話

木川恭介 12歳

誕生日5月2日

身長154cm

体重49kg

好きなもの

レベル上げ、強めの炭酸

嫌いなもの

特になし

怖いもの

母の拳

髪は若干茶髪。服を着てると分からないが、筋肉質。顔立ちは整っていて、学年問わず人気が高い。友達は意外といえる。

勉強も運動も何でもできる。ただ、体育は寝ぼけたままなのが大半なので、寝ぼけないで参加するのは稀である。寝ぼけないで体育に参加すると、無双できるレベル。

体力測定では他の追隨を許さない成績を叩き出した。(小学生の出席の限界レベルに調整してある)

授業はいつも寝ている。安芸先生除く先生方は既に起こすのを諦めてるが、鷺尾は諦めていない。今のところは全敗であるが。

知力が高いおかげで、一を聞けば十まで理解できる。暗記も得意。園子は居眠り仲間で鷺尾被害者の会会員。クラスメイトからは園子と行動が似ているため、兄妹なんじゃないかと疑われることもある。

起きてる間は、主に鷺尾と園子と話している。二人の息びつたりのボケには鷺尾もたじたじ。その様子をクラスメイトは微笑ましそうに見ている。

最近では、銀とその友達も会話に参加することが多い。着々と交友関係が拡がりつつある。

レベル上げが大好き。無茶はやるが、無謀なことはしない。ハイリスクハイリターンなら喜んでやる。

スキルアップのために興味のあることは何でも手を出す。ただ多趣味だが飽きっぽい。大抵のことは三日あれば覚えれる。

バーテックスと戦うときの武器は拳。次点で刀や剣。ただ、魔力で覆っても衝撃は刀に行くので折れてしまうという欠点もある。

勇者とは違い、神樹様の力を借りずに自前の身体能力で戦っているため、大赦からは勇者と同じ待遇を受けられるが、勇者とは呼ばれない。

家族はバーテックスと戦ってることを知っているが、クラスメイトは知らない。たまに休むことがあっても、先生が誤魔化している。

戦闘服はないので、その時着ている服が戦闘服。

たまにする勇者との三対一の戦闘訓練じゃ、ハンデをつけても負けない。勇者たち曰く、その時の恭介は魔王にしか見えならしい。

平日の日程

0 : 00 ~ 5 : 00 親が寝静まった後に外で訓練
5 : 00 ~ 5 : 30 シャワー
5 : 30 ~ 7 : 30 睡眠
7 : 30 ~ 7 : 45 食パンを啜えながら登校
7 : 45 ~ 8 : 30 睡眠かお喋り
8 : 30 ~ 15 : 30 睡眠
15 : 30 ~ 15 : 45 下校
15 : 45 ~ 18 : 30 特訓か趣味
18 : 30 ~ 19 : 00 夕食
19 : 00 ~ 19 : 30 食後の休憩
19 : 30 ~ 21 : 00 筋トレなどの訓練
21 : 00 ~ 21 : 30 風呂
21 : 30 ~ 24 : 00 体を動かさない訓練か趣味

親からは夜は早く寝るように言われてるが、それを破って訓練しているためバレた瞬間、拳骨が大量に降ってくる。その威力は漫画でよくあるたんこぶみたいになる。

休みの日は基本的にスキルアップのために、パルクールや山に行ったりしている。

とりあえずの合宿が終わり、俺のレベルはトータル7上昇した。スキルも凄いな数増えた。勇者たちの連携も深まったようだ。意義のある合宿に出来た。

合宿終わりの学校でも変わったことは、精々、銀が学校に猫を連れてきたぐらいで特になく、睡眠時間に費やしていたら、いつの間にか迎えていた週末。

週末はスキルのレベル上げの一環として色々なところに行ったりする。今日は山だ。

今回する訓練は人里離れた深い山じゃなくていいので、歩きで行ける距離にある手頃な山に行くことにした。

動きやすい服装で、軽く走りながら向かっていると、よく知っている二人、加えて言うなら勇者が誰かの家を覗いていた。

鷲尾なんてガチの覗き道具を使っただ。

勇者が犯罪は笑えない。

とりあえずやることは一つしかないだろう。ポケットからスマホを取り出す。

「すみません、警察ですか？同級生が覗きの現行犯で」

もちろん本当にかけてるわけではない。知り合いじゃなければ通

報案件だが、友達であるなら99%犯罪者の可能性があっても、残りの1%で勘違いだと信じるものだろう。

「ちっ、違うのよ！これは……」

こちらに気が付いた鷲尾がワタワタと手を動かして弁明しようとするが、まるで心に響かない。

もう100%犯罪ですわー。

そこで、のほほんとしていた園子から援護射撃が来た。

「ミノさんの遅刻の原因を探ってるんだよ。きよーくんも一緒に行こう」

「そ、そうね！木川くんも行きましよう」

園子の誘いは純粋なお誘いだが、鷲尾のは共犯にしようとしているだろう。お前、本当に俺の扱い雑になってね？

俺は半ば連行される形でお使いに行った銀の尾行をすることになった。

観察していると銀の巻き込まれっぷりがよくわかった。お爺さんの道案内をしたり、倒れた自転車を直したり。

イネスについてからも、子供の喧嘩を仲裁したり、今でも目の前で袋から落ちた果物を拾っている。

「もう見てられないわ。三ノ輪さん」

「えっ、須美?!」

「園子も来てるんだぜ」

「ついでに恭介もいま」

「手伝うわ」

「え？え？なんだよ、お前ら」

果物を拾い終わってから、昼食をとることになった。今日の訓練は諦めて、俺も昼食を取ることにした。

俺と鷲尾と園子がうどん、銀がメガ・チキン。

本音を言えば昼はラーメンが食いたい。でもうどん県なだけあって、ほとんどラーメン屋がない。それにラーメンなんか食ってたら鷲尾に何言われるか。

「じゃあ三人とも家の前から見てたつての？なんか恥ずかしいな」

「恥ずかしくなんかなくないよ。偉いよ」

「いつも遅れる理由はこれだったのね」

「言えればいいのにな。それなら鷲尾もガミガミ言わないと思うぞ？」

「いや、それは……他の人のせいにしてるみたいだし。何があるうとも遅れたのは自分の責任な訳だしさ」

「昔からそんな体質なの？」

「ついてないことが多いんだ。ビンゴなんて当たったことないもん」

はあ、とため息をつく銀。

どうやら本当についてないらしい。

感覚的に分かる樹海化の前触れ。時が止まり、周囲はピクリとも動かなくなる。

「ご飯ぐらいゆっくり食わせてくれよ、バーテックス」

そう愚痴を言いながら、樹海に呑み込まれるのを黙って受け入れた。

今回の敵は、山羊座を冠する、カプリコーン・バーテックス。特徴的なのは四本の先端が尖った足と前足と前足の間に生えてる細長い棒。

胴体より上はこれといって特徴はないので、警戒は怠らないが攻撃方法は足のみだろう。

「今回俺は戦えないから、頑張れよ。危なくなったら助けてやるから」

「お願いね」

「来るわ」

「ビジュアル系のルックスだな」

鷲尾が少し高いところに跳んで、弓をつがえる。ギリギリと弦を引いて狙いをつけていると、バーテックスが地面に降り立って、棒で地

面を突いた。

棒を震源にして、樹海全体に揺れが広がる。銀と園子、弓を構えていた鷲尾はたたらを踏む。俺は空歩で若干浮いてるので問題なし。

鷲尾が揺れを我慢して弓を構えるが、強い焦りと重圧が見てとれる。あれじゃ当たるものも当たらない。

「落ち着けて、須美」

「三ノ輪さん」

「私たちと一緒に倒そ」

「乃木さん」

「合宿の成果を出す。そうだろ？」

「みんな……………」

鷲尾の表情が和らいだ。

揺れが収まった。みんな一斉にバーテックスの方を見ると、足が一本こちらに向けられていた。

園子が前へ出ると同時に足が伸びて、突き刺しに来る。

園子がそれを盾に変化させた槍で押し返す。

「敵に近づくよ〜！」

「了解」

近付こうと走る三人だが、それを嘲笑うようにバーテックスが飛び上がった。

どう足掻いても攻撃が届かない距離に上がって、そのまま落ちることなく留まっている。

俺は空歩があるが、三人に攻撃を加える手段はない。遠距離攻撃ができる鷲尾でも届いてない。

「何か……………仕掛けてくる」

園子がぼそりと呟く。

バーテックスの足が四本まつまり、巨大な槍となって落とされる。回転も加わっているので槍というよりドリルか。

ドリルの切っ先は銀に向けられていた。

銀は動かず、それを二丁の戦斧を重ねて受け止める。金属同士がぶつかり合うことで悲鳴のような甲高い音が響く。火花も散る。

「一分は持つ！上の敵をやれ！」

かつこいいな。俺が女だったら惚れそうだ。うん、気持ち悪いな。一分は持つと言ったんだから、銀を信じよう。ただ念のため砲撃の用意だけしておこう。

「私たちが敵を叩くよ！」

園子が槍を振り回すと、先端が紫に輝き、一筋の線になる。槍を振り抜くと、紫の軌跡が宙に伸びて階段となる。

「わっしー！上！」

「りよ、了解」

鷲尾が階段を登りながら、弓をつがえる。ゲージが最大まで溜まるのと同時に、階段を蹴り、跳ねる。

「届けえー!!!」

鷲尾の放った矢は放物線を描きながら飛び、バーテックスに突き刺さる。矢は突き刺さった箇所を中心に爆発を起こし、バーテックスの体に穴を開ける。

バーテックスの体がぐらりと揺らぎ、ドリルの切っ先が地面へと向かう。

バーテックスの高度が下がる。

それを好機と見た園子が槍の先端を、より鋭さを増した形に変化させ、突撃いー！と声に出しながら跳んでいった。

紫の流星がバーテックスの体にもうひとつの風穴を開けた。

「ミノさんー！」

「砕けー！」

「三倍にして返してやる。釣りは取っとけえー！」

銀の二丁の戦斧の紋様が回転して炎が巻き上がる。銀が飛び上がり、凄まじい速度でバーテックスを切り刻む。

バラバラにされたバーテックスの残骸は下に落下していく。最後まで残った核を渾身の力で切り飛ばし、銀は落下していく。

「よっと。お疲れ様」

地面に落ちる前に空中で銀を受け止める。これは手を貸したことにならないだろう。

何度か空歩を使って着地して銀を下ろすと、立つのも億劫なのか、後ろに倒れこんだ。こんな状態でも受け身を取れるのは訓練の賜だ。

「戦いはどうだった？」

「腰に来る戦いだっただな。もうやりたくない」

「次は変わってやるよ。まあ、俺もなるべくならやりたくないけど」

「そこはかつこよく、俺に任せろって言うところだろ？」

「銀の方が似合いそうな台詞だな。おっと、鎮花の儀も始まったし、俺はここまでだな。じゃあな」

やはり、俺は樹海化の前と同じ場所にいた。時間が止まっていたことを知らせるように目の前の料理からは湯気が立っている。

メアリーセレスト事件みたいだな。

幸いフードコートには人があまりいなかったので銀たちがいなくなったことを騒がれることはなかった。

SNSアプリを起動して、仲良し四人組のグループをタップ。ご飯どうする？と送る。

俺は一人黙々とうどんを食べていると、返信を待っていると、スマホが震えた。

画面には「わっしーがデレたよ！」と全く関係ないことが書かれていた。

返信に迷ったが無難に、良かったな、と返しておこう。

それから遅れて銀からご飯は取っておいて、と送られてきた。

銀たちが帰ってきたのはこのメッセージから大体二十分位後だった。

こちらに歩いてくる三人を見つけた時、雰囲気は僅かに違和感があった。ただ、それは悪い意味ではなく、良い意味でだ。

声が届く距離に来たとき鷺尾が二人のことを銀、そのっち、と呼んでいたのには耳を疑った。あの堅物の鷺尾があだ名で呼ぶなんて。

今回のバーテックス狩りは戦闘以外で得ることの方が多かったみたいだ。

それと俺の呼び方も木川くんから恭介くんにランクアップしました。俺も須美と呼ぶことになりました。

これはクラスの男子から熱死線を貰うことになるだろう。

Love Letter 《愛の手紙》ではなくRough Letter 《粗暴な手紙》がいくつか届くことになるかも。

いつ呪われてもいいように呪い耐性でも取得しておこうか。

五話

最近訓練詰めだったので、安芸先生から休暇をもらった。俺には念を押して、休むように言ってきた。どれだけ信用ないんだよ。

はい！と元気よく言ったのに疑いの目をやめなかつた先生はひどいと思う。

というわけで、何をしようか悩みながら、ぶらぶらと外を歩いていた。

人の行き来が盛んな大通り。

歩いていけば知り合いに会えるかも。

そんなことを考えてると、いかにも高そうな車が脇に止まった。窓が開いてそこから顔を覗かせたのはパリピなファッションの園子だった。奥には須美も乗っている。

「へいへ〜い。その男の子〜。一緒に遊ばない〜？」

「人違いです。すいません」

通行人が俺と園子を奇異の眼で見ってくる。

さつきは確かに会えればいいと思っていたが、こんな出会いなぞいらない。

俺は頭を下げてから足早にその場から走り去る。車の通れない路地裏に入り、上に跳んで、家の屋根に飛び乗る。

黒服でも追ってくるんじゃないかと気配を探っていると、ポケットに入れていたスマホが震えた。

園子：ごめんなさ〜い

園子：謝るから一緒に遊ぼ〜よ〜

恭介：……………

須美：そのつちが本当に悲しそうだから許して上げて？

恭介：分かった分かった。それでどこか行くのか？

園子：私の家だよ〜

恭介：分かった。銀も誘うんだろ？

園子：うん

乃木家は大変立派でした。権力の格差を痛感する。乃木家に楯突いた瞬間に四国追放されるんじゃないかってレベルだ。

園子に案内されたのは衣装が飾ってある一室。家は和風なのにここは洋風だ。部屋の様子とあったデザインのダンスが並べられていて、開け放たれている。

普通の服から、高そうな装飾が施されたドレス、他にも着物やスーツ等々。無粋な話だが、この一室でいくらの価値があるのか気になつてしまう。

俺は、銀が着替えるというので、部屋から出ていく。銀の様子からして着替えを渋るかと思つたのだが、存外早く終わった。

園子から入つていいとお言葉を貰つて入つてみると、丁度須美が漫画みたいに鼻血を吹き出していたところだった。

それでもカメラで銀を撮影してるんだから、執念が凄い。

「須美つて意外とギャグキャラだよな」

前のキャラ像がボロボロに崩れ去つた瞬間だった。

「わっしーはおもしろいね〜」

「それにしても、似合ってるな」

今の銀の姿は上はベージュ、下は黒のゴシックドレスに身を包んでいる。髪には赤い花のコサージュ。

普段は男らしい銀もさすがに恥ずかしいのか、しおらしい。

俺の言葉にさらに顔を赤くする。なんというか、嗜虐心が芽生えそう。とりあえず俺も一枚。

「それでしょ〜?」

「文句なしの美少女だな」

「おお。きょーくん大胆〜。それじゃ次の服行つてみよ〜」

このあと、銀はとつかえひつかえ色々な服を着せられていた。そのお陰ですっかり拗ねてしまった銀。部屋の隅で膝を抱えて頬を膨らましている。

「じゃあ、次はきょーくんとわっしーだね〜」

ダンスの中から取り出したのはドレスとタキシード。

満足げに地面に寝転んでいた須美が驚き、えっ！と声をあげる。俺はなんとなく予想していたので別にいい。

「これとか似合うと思うよ〜」

「駄目よ！そんな非国民な格好！」

全力で拒否してる須美だが、ここで園子に味方が現れる。

「いやあ、似合うと思うなあ！」

今の今まで拗ねていた銀が急に元気を取り戻した。その顔は、返ししのチャンス！と如実に語っていた。

「んじや、俺は隣で着替えてくるから、鷲尾もぐゅっくり」

俺は園子からタキシードを受け取ると、そそくさと退散する。

「二人とも似合ってるよ〜」

「そ、そうかしら？」

案外、満更でもなさそうな須美。

「今更ながら、何でこの組み合わせなんだ？タキシードとドレスって結婚式かよ……………あ」

思わず出た言葉に、失言だった気付いたときには遅かった。

「けっけ、結婚……………！」

横の須美は顔を赤くして、頭から煙が出てる。須美には男女のそういうのに過剰な反応を示す。失敗したな。

「ほれほれお二人さん。腕組んで」

「銀。須美に仕返ししたいからって俺を使うなよ。それに横の須美なんか既に頭ショートしてるだろ」

「二人ともいいいいいよ〜。創作意欲が湧いてくるよ〜」

園子は両手の親指と人差し指で長方形を作って、その枠の中に俺と須美を捕らえながら、にこにこしている。要するに高みの見物だ。だが残念。一人だけなにもしないのは不公平だろ？

「それじゃ、次は園子だな」

「へ？」

珍しく呆ける園子。レアなのでカメラで撮っておく。あとで銀と須美にも送っておこう。

「そうだな。あたしと須美と恭介は着替えただから次は園子の番だな」

「銀、須美。園子を押さえとけ」

「了解！」

「え〜！」

がつしり拘束された園子が情けない声を上げるが、聞こえない。俺はダンスを漁りながら、園子の着なすそうな服を選ぶ。

ということで、園子には黒のゴスロリ服を着てもらった。オプションとして眼帯と日傘を持ってもらい、黒一色にしてみた。中二病でも恋をしている少女みたいな格好だ。

「似合ってるぞ。園子」

とりあえず一枚。

「嬉しくないよ〜」

園子の泣き言は大変珍しかった。

そのあとも色々な服を着ました。

園子に付き合って、若干中二病の格好をして、二人で並んで写真を撮った。

ハロウィーンをイメージして、俺は吸血鬼、銀が悪魔、園子は化け猫、須美は魔女の格好をしてからそれぞれのポーズで集合写真を撮った。

次はお正月イメージで着物。須美はさすがとしか言えないほど着こなしていた。園子も銀も似合っていました。もちろん集合写真

……

楽しい休日でした。

学校の昼休み。

今現在、小学生らしく皆はお絵かき中だ。

「何かリクエストあるか？」

「んー。なら、あたしたちを書いてよ」
「了解」

鼻唄混じりに線を足していく。いつも見ている三人なので、いちいち比べなくても描けてしまう。それが、一緒にいた期間の長さを感じさせる。

横で須美が戦艦を描き終えたのと同じくらいで俺も終わった。

俺が描いたのは、須美と園子と肩を組んでる銀の絵だ。時間も足りなかつたが出来映えとしては上々だ。

「きょーくんは器用だね〜」

「時間がなかつたからな。今度描くときはちゃんとしたキャンバスにでも描いてやるよ」

「お〜、それは楽しみだね〜」

「そういう園子は……何というか、独創性豊かだな。須美も須美らしいな」

園子の絵は、本当によく分からない。人みたいな二足歩行型のサンチヨと犬みたいな四足歩行のサンチヨ。

須美は須美で、超リアルな戦艦を描いている。

「えへへ〜」

「翔鶴型航空母艦、瑞鶴よ」

「リアルだな」

「須美ってそういうのやたら詳しいよな。合宿のときもそうだったし」

「夢は歴史学者さんだから」

「やっぱり真面目なんだ」

「わっしーっばい夢だよね」

「そのっちは？何か夢はあるの？」

「私は小説家とかいいなって思って、時々サイトに投稿したりしてるんだよ」

「ああ、なんか納得」

「独特の感性だものね」

「だから、この前創作意欲とか言ってたのか」

「三人も小説の中の登場人物として出演してほしいなく。優しくて頼れるミノさんに真面目で時々面白いわっしー。そして、ノリが良いけど意外としつかりしてるきょーくん」

「意外は余計だ」

「と、時々……おもしろい……」

「つまらないよりいいじゃん」

「そうなんだけど、私も頼ってほしいわ」

「あたし、そうやっていじける須美の顔好きだな」

「えっ！そんな風にほめられても」

「おお！何かいいよ！今の二人の空気。とつてもいいよ」

「そ、そういう銀の夢は？」

「幼稚園の頃は皆や家族を守る美少女戦士になりたかったな」

「分かる！お国を守る正義の味方。それは少女の憧れよ！」

「今は？」

「……家族っていいもんだから、家庭を持つのもいいなあって。でもそうになると、将来の夢が……お、お嫁さん」

「……なんか、ほっこりするな」

「そ、そういう恭介の夢は何なんだよ」

「今はこれといってないな。こん中だと俺だけ決まってないのか……」

今時の小学生はしつかりしてるな。高校生の時でさえ、進路決まってる奴なんか少なかったのに。

「大丈夫だよ。きょーくんなら」

「そうね。恭介くんなら大丈夫でしょう」

「そうだな。どうせ何とかするだろう」

「まあ、何とかなるか」

「なるなる」

ラブレター騒動？

「もうすぐ一年生とのオリエンテーションです。六年生としての自覚を持って、しっかりと後輩の面倒を見ること」

「オリエンテーションって何するんだっけ？」

「一年生と一緒に楽しく遊びましょうってことさ」

「相手は真つ白な一年生。私たち勇者の役目はこの国を守ること。つまりー」

「つまり？」

「将来を見越して愛国者精神の強い子供たちを育成することも任務の一環と言えるわ」

「言えるか？」

「いや言えないだろ」

「なんだか楽しそうだね。なら計画を立てようよ……あれあれ、中にお手紙が入ってたよ？」

「おっ、久々に見たな」

園子にも春が。これは銀と須美も囁し立て――

「果たし状か?！」

「不幸の手紙かも?！」

――なんで、そんな発想に至るのかお兄さんよく分からないよ。

「きょーくんは貰ったことあるの？」

「何回かあるな。全部下駄箱だったけど」

机から離れないから入れようにも入れられないからな。

「一回開けてみるね。えつと、最近気が付けばあなたを目で追っています。私はあなたと仲良くなりたと思います。お役目で大変だと思いますが、だからこそ支えになりたいと思います、だつて」

真ん中あたりの文でようやく銀が気付いたようで顔を赤くしてる。

「ももも、もしかしてそれって、あれじゃないか？最初にラのつく」

「ここまでヒントがあれば、さすがに須美も——
「羅漢像!？」

——須美はやはりポンコツでした。

「違う！ラブレターだ！」

「ああ、そう……………ララララブラブラブ」

一旦呑み込んだ須美だが、少しの間を開けてから、呑み込んだ言葉を反芻して動揺する。

「壊れたラジオかよ。でもそれって…………」

「うん、多分女の子からだね」

「なんだ女の子かあ」

こうしてラブレター騒動は幕を閉じた。終始、騒動していたのは銀と須美だが。

余談だが、この日の夜、須美が庭で火の前に立って物凄い形相で何かを唱えてるのを見てしまった。明日、どんな顔して会えばいいのか分からない。

今日も訓練はお休みだ。今回の休暇はみんなでプールで過ごすことに決めた。例に漏れず、俺だけ念押しで休むように言われた。

結構な規模のプールを大赦が貸しきってくれたので、今日は思う存分遊べるとはしゃぐ三人。

「あー。涼しい」

かく言う俺もなかなか楽しんでいる。この猛暑日にプールは素直に嬉しい。

「そうだね。気持ちいいよ」

「恭介も園子も緩んでんなあ」

「緩んでないのなんて、あそこで準備体操してる須美ぐらいだよ」

「水の事故は怖いのよ？」

この面子なら心配ない気がする。

すると、銀が須美に不躰な視線を送っていた。

「それにしても須美って本当にボインだよな。実は高校生じゃね？」
「もつといつてると思うね。大学生くらいかも」

園子も乗るのかよ……………

「お前ら高校生男子かよ」

「恭介は気にならないのか？」

「特にならないな」

「これが本音なのが、きょくんのすごいところなんだよね」

「友達としては付き合ひやすくもいいけど。恭介が男なのか、時々怪しくなるよな」

「はいはい、二人ともそこまで。ねえ、銀。競争しない？」

「面白い。その挑戦受けてたっ」

「二人とも、このあとオリエンテーションの作業があるから飛ばしすぎな、キャッー……………あはは、聞いてないか」

「絶対銀はバテるな」

すごい速度で水飛沫が遠ざかっていく。

「須美の性格も軟化したよな」

「そうだね。クラスのみんなも言ってるよ」

「前の須美を知ってる俺達からしたら、別人にしか見えないよな」

「そうだね」

「園子は変わらないな」

「そういうきょくんだって、人のこと言えないでしょ？」

「俺も園子も一生変わらなそうだな……………」

須美と銀の水を掻き分ける音がなくなつた。遠くからするセミの聲がはつきり聞こえる。

浮き輪に乗り、水に揺られていた園子が燦々と輝く太陽に手を掲げ、穏やかな表情で言った。

「……………平和だよ。こんな日がずっと続けばいいのに」

「……………そのためにも頑張らないとな」

「うん、頑張ろー！」

そのあと、俺は別の出し物なのだが、何故かオリエンテーションの準備を手伝わされました。

オリエンテーションション当日。俺は勇者組とは別行動だ。勇者組は少し遅れてからやるようだ。

「よ、よ、よ」

『……………』

キラキラした目で一年生がこちらを見てくる。

俺の出し物は大道芸だ。歯を潰してあるナイフを作り出して、ジャグリングする。

三本、四本、五本。いつの間にか増えていくナイフ。上がる回転率にハラハラしつつも、楽しんでくれてるようだ。

ある程度、客が集まった———というか、集まりすぎた。六年生までもが客となっていた。

ジャグリングを終え、傘でボールを回したり、椅子をいくつも重ね、その上で倒立したり、大盛り上がりだった。

オリエンテーションリングの制限時間の半分になったので、俺の演舞はここでお開きだ。

もつとやってー、という声が多かったのだが、次にもう一つ面白いことが起きるといったら、納得してくれた。

俺がやめたのと同時に銀が入ってきて、勇者組の出し物が始まった。

俺もそれを後ろから眺めていた。

勇者組の出し物は、国防体操。もう、ネーミングだけで分かる圧倒的須美感。

それでも受けは良かった。新生たちも満足そうだ。

互いに労いながら廊下に出ると、安芸先生にまとめて捕まって、廊下に正座だ。

「過激すぎます！特に木川くん！」

「受けるかなあと思ってた」

「一歩間違えたら大怪我に繋がるんですよ！」
「ごめんなさい」

安芸先生には敵いませんでした。このあと、足が痺れて歩きづらかった。クラスに戻るのも一苦労だった。

六話

「手のマメがちくちく痛いよ。今日の訓練大変だな」

園子が涙目になりながら手のひらを見せてくる。両手の指の付け根にマメができていて、確かに痛そうだ。

「槍の握りかた変えてみるとか？」

「変えてもどうにもならないっ」

「いつそ素手で戦ってみるか？」

拳を突き出すと、銀にため息つかれ、アホを見る目で見られた。銀にその目をされるのは、本当に納得がいかない。

「それを出来るのはお前だけだ。ほれほれ。痛い痛い飛んでけ」

銀が園子の頭を撫でる。園子も気持ち良さそうに頬を緩ませてる。

「えへへ」

「お前らもなかなか姉妹みたいだよな。そうすると銀が姉だな」

「園子が妹か。手がかかりそうだ」

「絶対かかるな。構わないと拗ねてそう」

「むう」

「ちようどこんな風に」

頬を膨らませて、わたし不満です！みたいにこちらを見てくる。典型的な拗ね方だった。予想と寸分違わない。

「悪い悪い」

「ふわあ。ミノさんのナデナデもいいけど、きよーくんのナデナデも気持ちいいよ」

ドスン！

園子の机に揺れが走った。震源は一冊が分厚い本×3。

「三人にはこれを渡しておくわ」

「須美さん？何すか、コレは？」

「おいおい見れば分かるだろ？鈍器に使うんだよな？」

「違います！遠足のしおりです！」

「これが？嘘だろ？何でこんな分厚くなるんだよ。広辞苑の二倍ぐら

「いあるぞ」

手に持ってみれば案の定重たい。パラパラ捲ってみると、びつしりと文字の羅列が並んでいた。図も載ってはいるが割合で言うと8：2。

そこらの哲学書よりも濃そうな内容だ。

どうやったたら、たった八、九時間の遠足のしおりが、哲学書の文字数に勝てるんだよ。

「データ版は三人の端末に送っておいたから」

「あー、だから昨日急に重くなつたのか」

とんだサイバーテロだな。

「わっしーはのめり込むタイプなんだね」

「将来、須美の旦那様になる人は幸せだけど大変そうだな」

「なんでそんな話になるのよ」

「この三ノ輪銀のような男がいればなあ」

銀の一言に須美が赤面する。男より男らしい銀と、おしとやかな須美。確かに釣り合いが取れそう。

「お似合いの二人だな（ね〜）」

園子も似た考えか。

「とりあえず、このしおりを活用して遠足の準備を済ませておきましよう」

「……………持って帰りたくねえ。めんどくせえ」

「家まで送るよ。ミノさんもね」

「おっ、サンキュー園子」

遠足の場所はアスレチック。それも結構な規模の所だ。勇者たち

の目標はアスレチック全面制覇らしい。

「そんじや、頑張れよ」

「お前もこっちだ」

さりげなく、休めそうな木陰に移動しようとしたのだが、銀に襟首捕まれて連行された。

黙ってついていこう。なので、引き摺るのはやめてもらえます？皆からの視線が痛いので。

最初はタイヤくぐり。

サクサクと終わらせました。

「さすが勇者、早い早い」

「恭介の方が早かったよな？」

「素の性能が違うんだよ。それにパルクールとかたまにやるからな」

「二人とも早いわね」

「あとは園子だけだが、大丈夫か、あれ？」

「わわわ、揺れる〜」

「慌てるなあ」

「落ちたら奈落の底って考えると結構なスリルがあるんだよ〜」

想像力豊かなことで。

「五番目のタイヤは触ってはいけない。触ったら最後、落武者の霊が、田んぼを返せ〜、と」

出た。須美の無駄に上手い怪談話。しかも顔もなんか迫力があつて、怖さが倍増。園子がガタガタ震え出した。タイヤも一緒にガタガタと揺れる。

「やめい」

コツンと額をチョップする。

「折角だからスリルを提供しよう」と

「ほらもうちよい、勇者は気合いと根性！」

「勇者は、気合いと、根性〜！」

銀が園子の勇者スイッチを押ししたようだ。園子が今までの震えがどこへやら、すすいタイヤをくぐり抜け——普通に降りれば良いものを——跳んだ。俺と銀の間めがけて。

「よつと」

銀と一瞬目を合わせて、二人で園子の体を地面に着く前に支える。

「ありがとう、ミノさん、きょーくん」

「ほれほれ、よくやったよくやった」

「えらいぞー園子」

「えへへ。次はもつとスムーズに行けるよ」

俺と銀が園子の頭をうりうりしていると、須美がぐりぐりと銀と園子の間から顔を出した。

「どした？」

「仲良くしてるから私も思っ」

「犬かよ」

「本当にさみしがりだよな」

「わっしーも撫でてほしいのかも」

最後は、アスレチックでよくある足場と縄を使って登る砦のようなものだ。

「これで終わりか。いやー簡単すぎるな。片手で上れるよ、こんなの」

「銀ふざげないの」

「平気平気……っ、ママが」

痛みにあえぐような声を漏らしてから、綱を離した。ゆっくりと銀が落下していく。

空から女の子が！なんて思いながら、銀の落下地点に先回りする。

「なんとなく、こうなる気がしてたよ」

お姫様だっここで銀を受け止める。もうすでに恥ずかしさもないのか、赤面もなく、地面に足をつける。

「いやー、悪い悪い」

後頭部を搔きながら笑って言う銀。

「お仕置きだ」

そんな銀の頭に手刀を落とす。

「イタツ。反省するよ。口数を減らします！」
びしつと敬礼をするが、説得力皆無。絶対に無理だ、と口をついて出そうになった言葉はギリギリのところまで止めれた。

お昼ご飯は班ごとに分かれて焼きそば作りだ。銀はものすごい手際がいい。須美もできている。園子は、やったことがないのだろう。

ここは一つ、銀にお褒めの言葉でも。

「流石将来はお嫁さん志望の銀だ。手際がいいな」

「な?! 恭介!」

素直に褒めたのに怒られた。何でだろうな。ただどれだけ威嚇しようとも、手は放せない。

「あはは、ほれ、手を動かせー」

「ぐっ、あとで覚えてろよ」

「捕まるとでも思ってるのか?」

「話しながらも凄い手際だわ」

「ね〜」

わいわい騒ぎながら作っていると、安芸先生が来た。

「二人とも上手ね」

「時々手伝ってますから」

「何事も極めたい性格なので」

「極められたのか?」

「フランス料理までなら作れる」

「十分すぎるわよ……」

「でもすぐ飽きるからな。何でもできる自分が恨めしい」

「ああ。恭介ならなんか納得」

「そのつちと同じ天才肌だものね」

「えへへー。誉められた〜」

「おっと。そろそろ出来るな」

「園子、須美、お皿の準備頼む」

「はっ!」

三人はベンチに座り、俺は一人草の上。いじめられてるとかではなく、人数の都合だからな。

「うまい！最高！」

「美味しいよ〜」

「園子はもっと良い肉食べてるんじゃないのか？」

「こつちの方が美味しいよ〜？」

「きつとみんなで食べてるからよ」

「園子、口、口」

銀が園子の口についてるソースをハンカチで拭う。これから銀と園子が姉妹説が流れるやもしれない。

「ありがとう。はあ〜」

笑顔になったかと思えば、園子のテンションが急降下。ため息を吐きながら、涙眼で項垂れる。悲しそうなのに、ちよつとコミカルなのはさすが園子だ。

「忙しいテンションだな」

「ミノさんもきょーくんもわっしーも料理できるのに私だけできないから、ふと自分が恥ずかしくなったんだよ〜」

「焼きそばぐらい園子もすぐ作れるようになるよ」

「じゃあ次の日曜日みんなで教えて！」

「いいけど」

「おっ！ハモった」

「ふふふ、そうね。ところで恭介くんの返事は？」

「俺はい——」

いいや、と残り二文字を口に出そうとしたところで、銀が邪魔する。

「恭介は強制参加だな」

「最近、俺の扱いが雑になってるんだけど」

「あら、それだけ皆が恭介くんを頼ってるってことじゃない？」

「銀の方が便りになりそうだけだな」

「それは……………否定できないわね」

「ミノさんもきよーくんも頼りになるよ〜」

「嬉しいこと言ってくれるな。ところで先生。ピーマン残そうなんて、子供みたいなこと考えてませんよね?」

安芸先生の意外な弱点。ピーマンが苦手。

いつも母さんを引き合いに出されるんだからこれくらいの反撃は許してもらいたい。

「うっ!ちゃんと食べるわよ?!ただちよつと苦手なだけ」

「前世で何かあったのかなあ?」

「そんな時はピーマンの精がお腹に会いに来ると思えば良いんですよ」

「そ、それはユニークね。あ、ありがとう」

先生の顔が何故か青ざめている。一体何を想像したのか。

「先生に褒められた〜」

「ご褒美にベルは園子が鳴らしなよ」

「ベル?」

「アスレチック全面クリア〜!」

「成し遂げたわね」

アスレチックにベルの音が鳴り響いた。

展望台からの見張らしはなかなか良いものだ。ボケーツと大通りを流れる車の群れを見ると、隣の銀と須美と園子の会話が聞こえる。

「あたしたちの町はあっちかな?」

「ええ、あっちで合ってるわ」

「大橋やイネスはさすがに見えないな……………」

「ミノさんはほんとにイネス好きだね」

「イネスはいいぞ！なんたって——」

『『中に公民館まであるんだから』』

「わたしも分かったよ」

「あんだけ言われたら誰でも分かるよな」

少しでも付き合えば、銀の行動の三手ぐらい先なら見えそう
だ。

「もうパターン読まれてきたか」

「わたしも読まれてる？」

園子は期待したような眼差しで俺たち三人を見てくる。が、ご期待
に沿えないで悪いが。

「そのつちは……………読めない」

「きつといつまでも読めない」

「未来視でもないし読めない」

本当に。園子は読めない。ここまで行動を悟らせない人はそうは
いないと思う。

「それはそれで悲しいよ」

「大丈夫。今の反応ぐらいまでは分かるから」

「やったぜ！ふうー！ー！」

園子は無駄に高い身体能力で、辺りを跳び跳ねてはしやぎ回る。

「こっからの跳ね具合が予測不可能だ」

「銀に同意」

「さすがね、そのつち」

「ついでに言うと、恭介も読めない」

「恭介くんは行動が突飛なところがあるから、ある意味そのつち以上
に読めないわね」

酷い言われようだ。園子よりは読みやすいと思うぞ……………多分。

「ちなみに須美に関しては取り扱い説明書が書けるくらいに詳しく
なったぞ？」

「あら、最初のページには何て書いてあるのかしら？」

「結構大変な品物なのでくれぐれもご注意ください」

「うゝ、めんどくさい人みたいな言われ方ね……。でも納得してしまおう」

「いいじゃん、奥行きがあつて。あたしのなんて新聞紙のちらし並みにぺらいぞ、きつと」

「最初のページは、元気すぎて手がかかりますので注意してください、ってところか」

「あたしは犬か！」

「確かに分かりやすくはあるけど書くことはいゝつぱいあるわ！」

「そ、そうか？」

「これからも色々な一面を暴いていこうと思うわ」

「お手柔らかに頼むよ……」

「実はわたし、初めミノさんが苦手だったんだ」

「おおい、いきなり何だよ」

「私も同じよ」

「おい」

「俺は特に何も思つてなかつたな」

「それが一番傷つく……」

「スポーツができて明るくて……。なんだか種族が違う気がして、でも話してみたらこんないい人なんだもん。わっしーも良いキャラだし」

「私はキャラなの?！」

「確かに話してみないと分からないよな、こういうのは。気に入ってもらえたなら良かった。これからもダチ公としてよろしくな」

『こちらこそ!』

学校でバスから降りて、帰路が同じところまで四人で歩く。

「はくく楽しかった。毎日が遠足だったらいいのにな」

「それ賛成」

「いやだよ。銀に振り回されそうだし」

「何をー！」

思わずこぼれた言葉に銀が噛みつき、飛び付いてくる。それをひらりと避ける。

「もう！転ぶわよー！」

須美の制止も聞かず、銀が追いかける。その顔は笑顔で怒りなど微塵もなさそうだ。須美も分かっている、仕方ないと苦笑い。園子は呑気に仲良しだねくと呟く。

そんな楽しい空気は破壊される。ピタリと風に乗っていた木の葉が止まった。

「これって……………」

「ああ、敵だ」

「もくく折角楽しい遠足だったのに」

「遠足終わったあとに出てきただけマシじゃん？」